本興寺だより

令和六年　七月
第二五九号

「法華経の心は、心すなわち大地、大地すなわち草木なり・・月こそ心よ、花こそ心よと申す法門なり」
（宗祖　事理供養御書）

梅雨に入り、雨が多く湿気も気温も高ければ、人は過ごしにくく感じますが、多くの植物にとっては恵みの雨であります。この時期の雨は、梅の実が熟する頃に降ることから、「梅の雨」（梅雨）とも、また植物の枝葉に沢山の露（つゆ）がつき、その風情から「つゆ」と呼ばれるとも言われています。

当山の境内にも沢山の紫陽花（アジサイ）が綺麗な花を咲かせてくれました。テレビやラジオでも放映され、週刊「女性自身」にも掲載されました。

花を見ていると、いろいろなことを教えてくれます。日陰の花の方が長持ちし、生き生きとしています。常に強い日を浴びている花は長持ちしません。程よい光と影が共に必要であることを実感します。

花のみならず人の生き方も同じです。人は何時も明るい光のみを求めて暗い影を避けたいと思っています。ともすれば「明るい光は幸せ、暗い影は不幸」と決めつける人生の生き方に、仏様は警鐘を鳴らしています。

明るいという字にも、暗いという字にも、共に左側に日が当たっています。辛く暗いと心が感じる時でも、そこから抜け出す道への光（日）が必ず差し込んでいるのです。

日蓮聖人は、法華経の教えは仏様の教えの全てが含まれており、世間の法（社会で共に生きる方途など）や全ての生き物が、命を輝かせて生きる術は、全てその中に説かれていると云われています。

心は大地のごとく、どんな重荷が降りかかろうともしっかりと支え、心は水のごとく、どんな汚れでも洗い落とし、心は火のごとく、どんな穢れでも焼き尽くし、盤石にして揺ぎ無く保つことが大事だと示されています。

月を見て美しく感じ、花を見て気持ちが和むのは、私たちの心がそれらと呼応するからです。人の心の中に、美しいもの、愛らしいものを感じる清らかな心があるからです。しかし日々忙しい生活を送るうちに、知らず知らずのうちに、清らかな心の存在を忘れてしまいます。

紫陽花を見に来られる多くの人は、皆穏やかな表情をされています。悩みや心配を抱えない人はいません。一時でも、それを忘れさせ、清い気持ちを思い出させ、心を和ませてくれる花のパワーはすごいと素直に感じます。一時の花の力をもらって、また日々頑張っていって欲しいものです。

花も樹木も果実も皆、大自然の営みは、生命に大きな安らぎと癒しを与えてくれます。

蓮の華の台座に座られている仏様が沢山おられます。神聖な存在とされてきた蓮（ハス）。不浄の泥の中から茎を伸ばし、その泥に染まらず清浄な花を咲かせる姿は、清浄と不浄、希望と失望が混在する人間の社会で、それらを越えて悟りの道を求め、自分の綺麗な花を咲かせる菩薩道を生きることを教えています。

法華経には、曼珠沙華（まんじゅしゃげ）が出てきます。天上に咲く花という意味で、彼岸花はこの曼殊沙華とも呼ばれます。

余談ですが、秋のお彼岸の頃、主に真っ赤な花を咲かせるこの花は、墓地の周辺などでよく植えられていたものです。その球根には毒があるため、雑草の繁殖やネズミ・モグラを避ける効果もあり、埋葬された遺体を守る意味もありました。一方球根は水にさらして毒を取り除けば、その球根を食べることができたので、飢饉や災難時の備えに植えられたものでもあります。先祖の人の知恵があったのですね。

何れにしても、大地に根差す、花や草木、野菜等大自然の恵みは、私たちが生きる上で、人の身体にも心にも、互いに大きな影響を与えあうものなのです。

特にお花は心を清浄にしてくれます。ご神仏も、生きている私達も、亡きご先祖も共に花を見て、その綺麗な姿とかぐわしい香りに心が癒されるのです。

人生の節目の大切な時、喜びの時も悲しみの時も、一大行事の時も、めでたい時も、哀しい別れの時も・・・心の共鳴ができるのです。花こそ心なのです。

法華経寿量品に「大火に焼かるると見る時も　我が此の土は安穏にして　天人常に充満せり」とあります。

仏様は人生で遭遇する様々な苦難は、私達が、肉体中心・五感（見る・聞く・味わう・嗅ぐ・触れる）中心・自己中心の生き方に偏り過ぎることから起こると云われます。

それが苦悩の「大火に焼かれる人生」を引き寄せるのだと。人が五感で捉えられる世界は小さく限られた世界なのだと。

心の眼を開けば、無限の神仏の世界が広がっていることを知る体験が訪れるのだと。その時に、実は此の土は安らかで、神々に護られている處なのだと気付くのだと教えています。

「言語道断」という言葉があります。言葉で言い表せないひどい事として使われますが、本来の意味は仏様の説かれた真理は言葉では表現できない奥深さを秘めていることを示しています。

「月はどこですか？」と聞かれ指をさして教えた時、指そのものは月ではありません。指の示す方向を見た時に、その先に月があります。

仏様の教えの文字は月を指す指です。その意味を信じて行っていく中で、本当の月（自分の人生を良き方に転換させる智慧）が授かるのだと云われます。

合掌

本興寺住職　中谷　聰秀